

# 大きなかしの木

小川未明

青空文庫



野のの中なかに、一本ほんの大きおおなかしきの木きがありました。だれも、その木きの年としを知しっているものがなかつたほど、もう、長ながいことそこに立たっているのです。

木きは、平常ふだんは、黙だまっていました。だれとも話はなしをするものがなかつたからです。あたりにあつた木きはいずれも小ちいさく、背せが低ひくうございました。その木きの親おやたちは、かしきの木きを知していましたが、もうみんな枯かれてしまつて、子こや孫まごの時代じだいになつていたのでした。そして、子こや、孫まごは、昔むかしのことを語かたろうにも知しってはいないからでした。

山やまから飛とんできた小鳥ことりも、たいていはちよつと枝えだに止とまること

があるばかりで、いずれも、秋あきならば赤あかく実みの熟じゆくした木きへ、春はるならば、つぼみのたくさんについている枝えだへ降りていつて、長ながくこの木きと話をはなししているものもなかったのです。

この木きも、若い時わかじぶん分ぶんは、ほかの木きにまけないほどに、美うつくしくなりました。しなやかな枝えだには葉はの色いろは銀ぎん色いろに光ひかつて、なよなよと風かぜに動うごいていたものですが、年としをとるにしたがつて、だんだん木きは、気きむずかしくなりました。そして、いつのまにか、のびのびとした、しなやかさはなくなり、葉はの色いろも暗くらく黒くろずんで陰いん気きになり、そして、木きは、たいへんに無む口くちになつてしまつたのです。

「ほかの木きには、あんなにきれいな花はなが咲さくじやないか。なぜ俺おれには、咲さかないのだろう？ またほかの木きには、あんなに美うつくしい

鳥とりや、ちようが、毎まい日にちのようにおとずれるのに、なぜ、俺おれのところへはやつてこないのだろう？」と、かしの木きは、不平ふへいをいいました。

気きむずかしい木きは、すこしの風かぜでも腹はらをたてていました。そして、不平ふへいがましく叫さけびをあげました。

「そんなに怒おこるもんじやないよ。」と、からかい半はん分ぶんに、風かぜは、かしの木きに向むかっていいました。南みなみの方ほうから吹ふいてくるやさしい風かぜは、どの木きにも草くさにもしんせつで、柔にゆうわ和わでありましたけれど、北きたの方ほうから吹ふいてくる風かぜは、小ちいさいのでも大おおきな中でも、冷れい酷こくで、無む情じようで、そのうえ寒さむく冷つめたいのでありました。

それも、そのはずで、南みなみからくるのは、橄かん欖らんの林はやしや、香かおりの

高い、いくつかの花<sup>はな</sup>園<sup>その</sup>をくぐったり、渡<sup>わた</sup>ったりしてきます。これに反<sup>はん</sup>して北<sup>きた</sup>からの風<sup>かぜ</sup>は、荒<sup>あ</sup>々<sup>ら</sup>しい海<sup>うみ</sup>の波<sup>なみ</sup>の上<sup>うえ</sup>を、高<sup>たか</sup>い険<sup>けわ</sup>しい山<sup>やま</sup>のいただきを、谷<sup>たに</sup>に積<sup>つ</sup>もった雪<sup>ゆき</sup>の面<sup>おもて</sup>を触<sup>ふ</sup>れてくるからでありました。そして、この孤<sup>こ</sup>独<sup>どく</sup>な木<sup>き</sup>を慰<sup>なぐさ</sup>めてやろうとはせずに、かえつてからかったり、打<sup>う</sup>ったり、ゆすぶったりするのは、いつも北<sup>きた</sup>から吹<sup>ふ</sup>いてくる風<sup>かぜ</sup>であつたのです。

「なにをしやがるんだい、

折<sup>お</sup>れて、たまるもんか。

あんな、めめしい木<sup>き</sup>や草<sup>くさ</sup>と、

俺<sup>おれ</sup>は、ちがうんだ。

裂<sup>さ</sup>けたり、折<sup>お</sup>れたりするもんか。」

かしの木は、風に向かつてこう叫ぶのでありました。

しかし、風のない日は、孤独のかしの木は、うなだれていました。疲れて、眠つてでもいるように、その黙った、陰気なようすはさびしそうに見られたのでした。

夜になると、雲の間から、星が、下界の草や、木を照らしたのです。そこには、美しい紅や、紫や黄色の花が咲いている花園があります。花園には、ちようや、みつばちが、花の上に止まったり、葉蔭に隠れたりして、平和に眠っていました。また、かしの木が独りぼちで、いつものごとく寂しそうに黙って眠っていました。

星は、平常孤独で、不平ばかりいつているかしの木を哀れに思

ったのでありましょう。そのやさしい、なみだ涙ぐんだ目つきで、めもりと黒くろずんだ木を照てらしていましたが、

「ああして、華はなやかに咲さいている花は、じきにしぼんでしまわなければならぬ。さらばといって、あの孤こどく独なかしの木が幸こう福ふくで、あき秋になると枯かれてしまう草が、はたして不ふしあわせであるということができるだろうか？」と、星ほしは、独ひとごとり言をしました。

ある年としの春はるの、ちようど終おわりのころでありました。どこからか、きれいな小鳥ことりが、親おやどり鳥とひな鳥どりといっしよに飛とんできて、この年としとったかしの木きに巢すをつつくりました。

いままで、この木きにとつて、こんなことはなかつたのです。このあたりの山やまや、原はらにたくさんいるような小鳥ことりは、たまには木きに



きて止とまったことがありましたけれど、旅たびからきた、このような美しい鳥うつくとりで巣すを造つくつたような記憶きおくは、かしの木きの過去かこになかったことでありました。

孤独こどくの木きは、どんなに、喜よろこびましたでしょう。

「そう、俺おれだつて、みんなから振り向むかれないものでもない。こんなうつくに、美しい鳥とりが、俺おれの枝えだにりっぱな巣すを造つくつたじゃないか？」と、広ひろ々びろとした野原のほらを見渡みわたしながら、誇ほこり顔がおにいました。

旅たびからきた小鳥ことりは、このあたりにいる小鳥ことりとはくらべられないほど美うつくしゆううつくございました。赤あかに、焦こげ茶ちやに、紫むらさきに、白しろに、いろいろの毛色けいろの変かわつた着物きものを被きていました。そして、おしやべりでした。

「お母さんかあ、いいところですね。」と、ひな鳥どりは、親鳥おやどりに向かむつていいました。

「ああいいところです。これから、毎日まいにち、いろいろめずらしいところへ連れていってあげますよ。」と、母鳥ははどりはいいました。

「まあ、うれしいこと、うれしいこと。」と、ひな鳥どりは、喜びよろこびのこえ声をあげました。

木の枝えだに巣すができあがり、親鳥おやどりはひな鳥どりをつれて、あるときは青々あおあおとした大空おおぞらを飛とんで海うみの方ほうへ、あるときは、また山やまを越こえて町まちのある方ほうへとゆきました。そして、夕方ゆうがたになると、彼らかれは、楽たのしそうにして帰かえってきました。

かしの木きは、美うつくしい鳥とりたちが、無ぶ事に、その日ひの晩方ばんがたになつ

て帰かえつてくるのを待まっていました。昼ひるの間鳥あいだりたちがいないのは、木きにとつて寂さびしかったのです。どこからでも、この野原のほらにこんもりと背せ高く立たっている木きのようすはながめられました。鳥とりたちが、この木きの姿すがたを目めあてに、雲くもはるかのかなたから飛とんでくると思うと、木きはいつそう高たかく背せ伸びをするように、夕日ゆうひの中なかに輝かがいたのでした。

木きは、無むくち口ちで、そして、こんな年としをとつていましたけれど、遠慮えんりよぶか深くありました。鳥とりたちから、南みなみの国くにの話はなしをききたいと思おもいましたけれど、つい、鳥とりに向むかかって、たずねることがありません。晩ばんに、鳥よりがもどってきたら、聞きこうと思おもいましたが、いざそのときになると、

「お母さん、今日は、遠くまで行ってくたびれましたのね。」

「お父さんは、まだ、遠くへいこうとおっしゃったのだけれど、おまえたちが、くたびれるだろうと思って、わたしが、反対したんですよ。」

「お母さん、また、明日の朝、早く出かけましょうね。」

「さあ、早く、お休みなさい。」

木は、鳥たちのこんな話を聞くと、また、つぎの機会まで待とうと思いました。

ある日のことあります。

ひな鳥は、母鳥とこんな話をしていました。

「お母さん、いつまでも私たちは、ここにすんでいますの？」と、

ひな鳥どりがたずねました。

孤独こどくな、かしの木きは、そのとき熱ねっしん心に耳みみを傾かたむけていました。

すると、母鳥ははどりは、これに答こたえて、

「ああ、そんなに、ここがおまえたちの気きにいったのなら、いつまでもいますよ。」といいました。

この話はなしを聞きいて、喜よろこんだのは、ひな鳥どりよりも、もつと、この年としとつた大おおきなかしの木きのほうでありました。

「ああ、なんの話はなしも、いま聞きくにはおよばない。冬ふゆのものさびしい時じぶん分ぶんになつてから、ゆつくり南みなみの方ほうの話はなしを聞きくことにしよう。」と、かしの木きは思おもつたのであります。

輝かがやかしい、希望きぼうに満みちた、夏なつの間あいだは、かなり長ながうございました。

しかし、そのうちに、秋あきとなつたのであります。

年としとつたかしの木は、周しゅう囲ういにあつたいろいろの木この葉はが、い  
つしか霜しものために色いろづいたのを見みました。また、足あしもとの草くさが、  
枯かれてゆくのをながめました。しかしこれは、毎まい年ねんのことであ  
りました。

ある日ひのことでした。朝あさの日ひの光ひかりの中なかを、翼つばさを輝かがやかしながら、  
青あおい空そらへ舞まい上あがって、どこともなく飛とんでいった、美うつくしい旅たびの  
鳥とりたちはその日ひ、太たい陽ようが西にしの空そらに沈しずみかけても帰かえつてきません  
でした。

「どうしたのだろう？」と、かしの木きは、いぶかしく思おもいました。  
その晩ばんは、かしの木きは、まんじりとも眠ねむりませんでした。鳥とりた

ちの身みの上うえを氣遣きづかつたからであります。それに、寒さむい北風きたかぜが吹ふいて、かしの木きに向むかつて戦たたかいを挑いどんだからであります。

ああまた、長ながい、物憂ものうい冬ふゆの間あいだ、この年としとつた木きと、北風きたかぜと、雪ゆきとの戦たたかいはじまるのであります。そして、かしの木きは、ついに孤獨こどくでした。

——一九二四・一一作——





# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷発行

※表題は底本では、「大《おお》きなかしの木《き》」となっています。

※初出時の表題は「大きな櫨の木」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：雪森

2013年4月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 大きなかしの木

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>